

ダイアン・アーバス「三人姉妹」(1963年)

「アメリカの写真/表現の展開」1960's-1980'sより (東京・中野坂上、写大ギャラリー、7日-6月1日)

文 化

六年連続マイナス成長の出版界で文芸出版の販路を海外に求める動きが出ています。米ニューヨークで日本人が設立した出版社が日本の小説の英訳を出し始め、講談社も米国最大手のランダムハウスと提携し、エンターテインメント性の高い文芸書の海外出版に乗り出すことになった。圧倒的な輸入超過の壁に風穴を開けることができるか。

「リング」他4冊 ニューヨークにある日系の出版社、パティカル社から日本の作家のエンターテインメント作品がこの四月に英訳出版される。出版されるのは鈴木光司の「リング」、江國香織の「さくらひかる」、北方謙三の「樺の哀しみ」、栗本薫の「グイン・サーガ」豹頭の仮面」の四冊。パティカル社は、大手新聞社の書籍編集者から転身した酒井弘樹氏が一九九九年春に設立した。コロンビア大出身の日系ギリシヤ人とハーバード出身のオックスフォード大出版部に頼っていた。「正直いってメセナ活動が主。一般大衆向けのミステリーやノンフィクションには向いていない。一般向けの海外出版は、これからはランダムハウスの強力なチャネルにのせていくことになる」と吉井局長。

文芸出版 海外に挑戦

抱えるランダムハウスは、講談社の海外進出を支援し、講談社の書籍を海外で出版していく。「日本の市場の規模は世界の約一割。ランダムハウス側は、日本市場やアジア市場をにらんで拠点となる日本に足場を求めていた。講談社も従来のような文化の発信ではなく、ビジネスとしてエンターテインメント性の高い書籍の海外進出を図っていく必要があった。両社の思惑が一致した。ふとした縁から提携を推進した講談社の吉井順一デジタル事業局長はこう説明する。

も学術系のオックスフォード大出版部に頼っていた。「正直いってメセナ活動が主。一般大衆向けのミステリーやノンフィクションには向いていない。一般向けの海外出版は、これからはランダムハウスの強力なチャネルにのせていくことになる」と吉井局長。

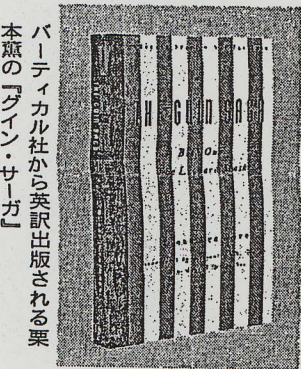
いま講談社文芸局が中心になり、ランダムハウスが編集・発行元となる日本のエンターテインメ

圧倒的な輸入超過



講談社は世界最大の出版社ランダムハウスと提携した(1月23日の記者会見)

パティカル社から英訳出版される栗本薫の「グイン・サーガ」



ント作品を選定中だ。講談社が出す有名作家の作品がリストアップされていきそう。日本の書籍の翻訳が少

日本の小説を英訳

講談社は米最大手と提携

外向け出版情報誌を発行、海外から編集者を招いて日本の出版人との交流も図ってきた。「出版物の輸出は、二十年前の二対三六が、今は一対二〇まで改善された。翻訳出版は本来商業ベースでやるのが筋。基金の活動が露払いとなり、ビジネス面で海外進出の動きが出てきたことは喜ばしい」。同基金の齋木宣隆メディア事業部編集課長はこう語る。

近代化に遅れ

文化庁も昨年度から三億円をかけ、日本の二十七八人の作家の作品を英訳して米国などに寄贈する事業を進めている。この中には島田荘司「占星術殺人事件」、逢坂剛「斜影はるかな国」、山田詠美「ベッドタイムアイズ」の指の戯れ、ジェシーの「背骨」、夢野久作「ドラ・マゲラ」など、エンターテインメント性の高い小説も含まれる。今後、こうした作品がビジネスとして翻訳出版されていけば、プロジェクトとして成功だろう。

(編集委員 浦田憲治)